

浄土

1982-8

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和五十七年七月二十五日印刷
第三種郵便物認可
毎月一冊、一日発行
郵政省
第四十八卷



1982

武蔵野池群

大西耕三

正しい道を進め!!

—長老の教えから



いかように科学が発達しても、人間に自然を完全に征服してしまふ力はない。今年、五月の東京は暑かった。梅雨の前半は、ほとんど雨が降らず、後半は記録的な雨と梅雨あけの遅れで涼しい夏である。こうながめてみると、自然は大きなサイクルで常にプラスとマイナスの収支を合わせていることに気づく。その流れを人間が変えることはできない。

人間の寿命もまた同様である。仏弟子の一人、ヘーラ・ソニヤカー長老は告白している。

昼夜は過ぎ行き、生命はそこなわれ、死すべき人間の寿命は尽きる。小川の水のように。

しかし人々はそのことに気がつかない。気がついていても、それは遠いなにかのできごとのように思っている。ただ、賢い人々はそのことを知っている。

しからばわれわれはいかに生くべきか。

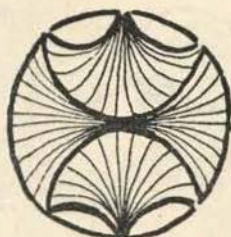
大海の上では、人は、小さな木片に乗っているならば沈むように、怠け者と交っているならば、立派に生きている人でも沈む。それ故に、努力もしない怠け者を避けよ。

(ソーマミッタ長老)

今や、人間は複雑な社会の中で一人だけでは生きて行かない。好むと好まざるとにかかわらず、人々はお互いにかかわりあいをもちながら毎日を生きている。そこにはいろいろな人たちがいる。よき師、よき友と呼べる人々ばかりではない、正しい道を進む人々を友として貴い一生をすごしたいものである。

(佐藤良純)

八月号



無明と欲と怒りと世尊は永く無し、人雄師子神徳無量なり。

——『無量寿経』 敷仏頌

目次

おほん法話(下)

立て前と本音……………宮 沢 善 弘……(2)

(一) (口) (法) (話)

釈尊成道と浄土宗開宗……………村 瀬 秀 雄……(6)

勢至丸さまを想う

無上道を志して……………土 佐 舜 成 ……(8)

勢至丸とその母……………大 橋 俊 雄 ……(12)

特 別 寄 稿

回心ということ……………渡 辺 杜 水……(17)

<勢至丸ものがたり>第三回

宇宙船往来……………布 村 哲 哉……(22)

インド文学の香り……『パーガヴァタ・ブラーナ』抄訳(Ⅲ)

蛇王カーリヤ退治……………小 山 典 勇 ……(27)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(20)

<表紙裏・巻頭言> 正しい道を進め!! ……………佐 藤 良 純

念仏ひじり三国志⑨ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(33)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

おぼん法話

(下)

立て前と本音



みやざわ 善弘
宮沢 善弘

(大本山光明寺執事
横須賀市正観寺住職)

わたくし達が日頃お経をあげるときは、必ず次の偈文^{げもん}を唱えてから致します。

無上甚深微妙法^{むじょうしんじんみみょうほう}

我今見聞得受持^{がこんけんもんとくじ}

百千万劫難遭遇^{ひやくくせんまんじゅうなんじくやう}
願解如来真实義^{がんげにょらいしんじつぎ}

この偈文の意味は色々に取れましようが、わたくしは次のように解しております。

仏説き給えるみ教えは甚だ深く、微妙に万人に当てはまる。

この妙理は絶対の真理で、代わるものはない二度と現われな

い。このみ教えを今見聞でき、身に受ける喜びを感謝する。

願わくば、仏の心の真実を確かに領解したい。

無形の条件や環境、そのいかに対しても常に真実の理をのべ、人間にとって絶対の道しるべであることを示しています。

經典に示される仏意は、仏教徒いや広く人間にとっての生きゆくための指標、人間の立て前に外なりません。

アメリカの心理学者でエリクソンという人は、その著「若者と危機」という本の中で、誠実、勤勉、信頼、自発性、自律、親密、その他の言葉について、その心理的反対語を挙げております。

普通これ等の反対語は、欺瞞、怠慢、背信、受動性、他律、疎遠などであり、学校での国語教育ではそう教え

ているはずであります。

それに対して、エリクソンは、誠実には絶望、勤勉—劣等感、信頼—警戒、自発性—罪の意識、自律—恥、親密—孤独という語を挙げ、若者に対する教育的配慮の本質と、その方法について述べています。一体この対照は何を意味するのか、一考の値があります。

ちょうど前回の原稿を編集者にお送りしたすぐ後の五月三十日、新聞各紙は第二次臨調第一部会報告の概要を掲載致しました。

その中で、「今後は、国民の自立、自助を根幹とする連帯、相互扶助が国家社会の運営の基本原則とならねばならず、行政の役割にも変化が求められている」と述べています。

わたくしは、前回に述べたとおり、連帯、相互扶助までも人間の根幹とすべきと考え、国家社会の運営の基本原則や行政の変化に求められるべきものは、人間の根幹を強力に顕揚する有為の方策でなければならないと思います。これについては報告の「文教政策」で触れていないのを残念に思いました。

また「新しい行政のビジョン」では、我が国の現状

を、「物的豊かさをほぼ達成し、経済面では知識やサービス的重要性が高まり、生活面での国民の意識も多様化する等成熟状態に近づいている」と分析しております。

物的豊かさは精神的豊かさに反比例し、知識やサービスの重要性の高まりは人間が本来蓄えるべき智慧の減退を進め、国民意識の多様化は人間の根本本性（例えば宗教心など）の軽視、または否定の傾向を容認するともいえますから、成熟状態とはいえますまい。

わたくしがこう申し上げるのは、決してこの報告を攻撃する意図からではありません。

むしろ、この国家社会に対して果して来た宗教の、過去の無力さを反省するのです。

わたくし達がもし、元祖上人ご在世の時代は戦乱の、武力台頭の、骨肉相食む闘争の時代であり、飢きん、疫病、民生の疲弊、民衆の困苦の時代であった、しかるに、今日は平和で満ち足り、恵まれた良き成熟に近づきつつある時代であるというならば、それは大きな歴史的誤認、史観を持たない表面的比較論といわなければなりません。

先に進めば良くなる、という思想は、ダーウィンの進

化論を誤解するものであるとし、最近議論ほうふつのようですが、良くなるという社会通念にもかかわらず、仏教では、本来、そうはいっておりません。キリスト教でもそのようですが、先きに進む程悪くなるというのです。これは人間に対する警告です。

詳しく述べるいとまはありませんが、仏教に正しく拠れば、現象はいかように見えても本質的には決して良くはなっていない。

フッサルという哲学者は、現象学という学問で、一般に現象からさかのぼって、事の真実の意味、本質を見きわめるのは非常に困難であると強調しました。

現象とはかくも不定見なものですから、一見表面では平和そうに見えても、より奥深く隠蔽に、人間悪や疎外、闘争が広がりはびこっている、と現代を意識することが大切です。

わたくし達は今、末法という言葉の口にすることなく、また、そういう世相であると自覚することもありません。だがここで、まさに恐るべき末法の世の進捗を、地球的視点に立って感知し、その認識でご降誕八百五十年の意義を噛みしめ、再出発を期すること、これが浄土

宗門徒にとって必要でしょう。

過日わたくしは、自坊の檀信徒と共に知恩院、百万遍知恩寺、岡山の誕生寺にお参りを致しました。

知恩の語の意味をこの身で受けとめ、お誕生の意義を温めるといふテーマを、皆が胸にいだいての団参でありました。

この参拝を通して強く感じた印象は、今この世にこそ宗祖が必要である、いや、今現に元祖様がここにいらっしゃる、という、言うに言われぬ体感でありました。

現に元祖様のいらっしゃるそのお前前で、わたくしは一体これで良いのだろうか。今こそ元祖様に直結して生きよ、と、この不思議な天啓を得つつ、ただ、涙が頬を伝わるのを禁じ得なかったのであります。

この体験は、おこがましいながら、元祖様が善導大師に対面されたご靈験の何万分の一のものでありましょが、きつと共通する部分があるうとの実感でした。

さて、わたくしはこの法話を通して、仏教徒が心を新たに、自らの心の根本を仏意に求めて生きること、これをあえて立て前と申してきたのでありますが、この立て前を貫く道筋を、浄土宗門徒であれば当然、元祖法然上

人のありのままのご生涯に求め、念仏為先のみ教えにただひたすら依るべきであると、こう主張したのであります。

この意味において、元祖様が「偏依善導」と申されたことを、それをそのまま、わたくし達が、「偏依法然上人」と承わる、それを手本として行ずる日常が今こそ必要なのではないか、と申し上げたいのであります。

このことを自信教人信せずして、何でご降誕八百五十年の意義の顕彰があらましよう。

念仏為先、ただ南無阿彌陀仏と申すこと、この外、今日今後とも、わたくし達の生きるよすがはない。すべてがここから発し、ここに戻り、また、そこから発する、とそう領解して他に思いを散らし他に求めることをしない覚悟、これを本心の叫びとする生活の自律は、新しい時代に向う、念仏信者の信条です。こう考えますと、立て前である仏意（阿彌陀仏の本願）に即して生きる、そのために、南無阿彌陀仏を称えることがわたくし達の本音でなければならず、この本音は、逃げでも隠れでもない、真実の道であると改めて気付くのであります。

そうしてわたくしは、元祖上人のありのままのご生涯

を、まさしく次のご法語をとおして感得するのであります。

○われはこれ烏帽子も着ざる男なり。十惡の法然房愚痴の法然房が、念仏して往生せんというなり。

○学生骨になりて念仏や失わんずらん。

○往生の業成就は、臨終平生にわたるべし、本願の文簡別せざるゆえなり。恵心の心も平生にわたると見えた

り。

○たとい余事を営んとも、念仏を申し申しこれをすると思いなせ。余事をしし念仏すとは思うべからず。

○心に妄念のいかにも思われ候はいかがし候べき。答。ただよくよく念仏を申させ給え。

わたくしは、最近、自らの心ばせと日常生活の規範、判断と行動化のための尺度を、右のご法語の心の中に見出しています。皆さんが他のご法語をお挙げになること、それはご自由で、しかもそのことが尊いのです。

それを以て、元祖上人と直線で結縁を得ようと努めることを、我れ衆生と共に來たるべき時代に備えての願行の基に置き、帰僧息諍論同入和合の世の建設を目差して前進する誓いと致しましょう。

(了)



(一) (口) (法) (話)

宗開浄土道成尊釈

お 雄 ひで 瀬 せ 村 むら

釈尊は紀元前五三〇年十二月八日払暁、明けの明星をみて悟りを開き給うた。それは夜でもなく昼間でもなく、光明が暗黒にとつて代ろうとする僅かな間のことであつた。釈尊は菩提樹の下に坐つてようやく真理を悟りかけた時に、魔王が一軍を率いて攻めてきた。釈尊は悪魔と闘う不安の中で一夜を明かし、ようやく空が白み始めると、長かった闇の世界が消え去ろうとしていた。安堵と希望にもえる目で空を仰ぐと、そこには大きな明星が鮮やかに輝いていた。こうして苦しかった修行と悪魔の誘惑を乗り越きつて悟りを開いた釈尊は、遁世の生活を捨てて広く人々を救う道に向つて進むことになり、禁欲の生活を捨てて誰もが修められる楽行の道を広く開き給うた。この時の釈尊の歓喜は、やがて真紅の姿を現わし、燦々と輝く太陽によって象徴されるものであつた。それだけの感激があつたからこそ、入涅槃の日まで教化を続け給うたのであつた。

それから二七〇〇余年を経て承安五年（一一七五）の春、法然上人は浄土宗を開き給うた。上人は多聞広学の学僧として認められ、当代随一の名僧という世評が高くなるにつれて、反つて凡夫が救われる仏の道を求め得ない悩みを深くしていた。ある日のことを決して経蔵に入り、手を差し伸べて一書を取り取してみると、そこには念仏を相續して唱える行が極楽往生をとげる唯一の行であると説かれていた。その時、上人が持っていた焦燥ともいえる悩みが一時に

消し飛んだ。その時の喜びがいかに大きかったかについて安居院の聖覚法印に語った上人の言葉によれば、「随喜の余りに身の毛がよだつ思いであつたし、歡喜の余りに、凡夫の行法をすでに阿弥陀仏が定めおき給うていたのであると、誰もいない所で高声に唱え、喜び涙が落ちるのをとめることができなかった」という。しかしその前に上人が肝に銘じて感じていたことは、同じく善導大師が、自らを罪惡を行いながら迷いの世界に暮す凡夫にすぎないといいきっていた言葉であつた。上人はある人に次のように語っていた。

「善導大師の教えによれば、深心は初めにわが身を煩惱具足の凡夫であると深く信じ、その上で阿弥陀仏の本願を深く信じる心のことである。もし大師が初めに凡夫という自覺をあげないで、ただ仏の本願を信じる心が深心であると説いていたとすれば、十惡や破戒の罪を犯している者は自らを卑下し、果して往生であるかどうかと迷い、仏の本願を疑つたことであらう」

上人は自らを、「黒い白いも判らない赤子のようであ

り、善い悪いも判らない無知の者である」といつているのも、上人に当代随一の学僧としての見識があつたからである。ある人が上人に尋ねていった。

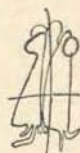
「一宗の教義をたてる程のことに、どうして僅か善導大師の一文だけを依りどころとしたのでしょうか」

上人は微笑するばかりで、何もいわずに黙っていた。するとその僧は上人が返答できないために黙っているのであると考へた。何も知らない者はど独り善がりの自信が強いというが、この僧もまた自分の知識の程度を知らなかつたのである。

釈尊が明星をみて悟りを開いたのは、いく世にわたつて人々を救う菩薩行を積んでいたからである。法然上人が善導大師の一文によつて浄土宗を開いたのは、一切經を五返も読み、自他宗の仏書をすべて読破していたからである。だからこそ上人はわが国に初めて易行の門を開き、末世に相應しく念仏の一行によつて、すべての凡夫を一人も洩らすことなく救うという法門をうちたて給うたのである。

勢至丸さまを想う

無上道を志して



と
土佐舜成
さ しゅん じよう

(神戸市阿弥陀寺住職)
(財)国際仏教興隆協会広報局長

今からちょうど八五〇年前、勢至丸（法然上人）は美作国（岡山県）久米南条稲岡の庄^と柄^こ社のお生れにて、現在の誕生寺が当時久米の押領使であった父漆間時国の屋敷跡といわれ、ご本尊（上人像）のあたりがご生誕の場所であったと伝えられている。

父は父祖伝来の稲岡の庄を領し、漆間氏と並び称せられる名門秦氏の姫を迎えて夫人とし、押領使とは兵を指揮して治安を維持するために郷土の信望ある者が任命される役職で、父時国は武士として又領主として仰がれるほど人のうらやむ身でありながら、ただ一つ不足として

御子が無かったのである。

御両親は御子を授からんがために、岩間の大悲十一面観音に参籠祈願しての一子が勢至丸であり、後年の法然上人である。

母秦氏は一夕剃刀を夢見て懷妊され、心身柔善の月満ちて母胎悩むことなく、崇徳院の御宇長承二年四月七日正午頃ご降誕、紫雲覆い異香満ち、時に白幡両流庭前の棕の樹にかかり、御両親のお喜びはいかばかりであつたであらう。

地方の豪族の独り子として御両親慈愛の下に育つた勢至丸九歳の時、突如として一家を没落せしむる悲劇に出会うことになった。

漆間時国と明石源内武者定明の衝突は、史実によれば当時の莊園拡大をめぐる争いと言われ、一説には水利用をめぐる長年の定明の怨念とも言われる。

人間の世界にあつて幸福といわれていても、それ自体が一転する危機を孕んでいる禍であるかも知れない。

稲岡の庄は自然の地形によって庄民の家々の用水として、又耕地の水として極めて恵まれたにも拘わらず、弓削の庄は水を田に引き入れ不足にして、稲岡を恨み、自

家用の池を造るべく水源に苦しんでいた。

当時の弓削の村人は、このような事情から日頃の鬱憤ついに爆発、若き預所の定明は彼等の暴挙を未然に防ぐだけの力もなく、ついに稲岡の漆間氏の館に夜討ちをかけたのである。

奇襲に驚かされた漆間氏は手薄に防禦の方法もなく乱入にまかせる状態であつた。時に母と共に夢見心地で寝ていた勢至丸は、その異常な騒音に起き上り、人々の制止するを振切つて飛び出し、父の危機を見るや小矢を射かけ見事に相手の眉間に当り、したたる血を押へたまま引上げて行つたのが定明であつた。

その後父時国の容体は思わしくなく、勢至丸と秦氏を枕許に呼び寄せ諄々と論すが如く語られた。

「いつまでも別れたくないお身たちだのに、これが今生の別れのように思われる。言い遣しをよくよく心して聞いてくれ。敵を恨むではない。敵は自分を傷つけたが敵もまた痛手を被っている。相討ちだ。自分は年取つて寿命が尽き傷が治らないだけのこと、決して仇を討つな

よ。若し仇討ちすれば世々に害心を懷きつづけるだらう。およそ生ある者は死をいたむことは限りがない。自分はこの疵が痛む。相手も又痛んでいるにちがいない。自分は無念で命が惜しい。しかし敵も命が惜しいと思う。早く俗をのがれて自分の菩提を弔ってくれよ。皆が救われる道を求めてくれよ。これが今生の別れの頼みである。」

静かに語られた時国の言葉の中には、当時の知識人の教養としての仏教の精神が深く根ざしている。その夜半一族の手厚い看護に見守られながら西に向い高声念仏して眠るがごとくにして此の世を去ったのである。時に御歳四十二歳であった。

後年、上人は「父の遺言忘れがたくして……」と度々述懐せられたのであるが、当時九歳の勢至丸にとっては如何に聡明とはいえ、その真意が分らず、しかし夫人はよく理解されたのか一語一語にうなづかれ、深く感銘を受けながらも良人との別れが悲しまれた。

葬送中陰の仏事を修めた後、稲岡の地を離れて実家に

帰り、気を転じ多少は気も安らいだものの、悲嘆は容易に消えるものでなく、母は夫時国を語り、勢至丸は父をなつかしむ思い出を語る毎日であった。

しかし母秦氏は良人の遺言に従い、又母の弟で出家している叔父観覚の推めもあって、その寺に入ったのが菩提寺である。

さて、九歳の童子が父の遺言によって直ちに仏門に入るといふより、この菩提寺における六年間の観覚得業が魂を打ちこんでの導きが上人の求道の心と道心の芽生えをつくり出したものではなからうか。

菩提寺では、嘗て父母から聞き及んでいた菩提樹の林の下に立って眺望すると、脚下に広い野原につづく津山、稲岡や弓削あたりまで遙かに見られ、いつも亡き父への追憶、母への慕情、定明への憎しみの念もあって、刻々に変わり深くなる夕もやを看経の後一人淋しく眺めていたことであらう。

しかし勢至丸は、そういうやるせない寄るべのない気持ちには一人自分だけでなく人間誰れしも折ふしあるもので、これこそ道を求める因縁と感知し、夜半静まりかえった本堂で一人ご本尊の観音像に合掌祈念することによ

って、今までの淋しさが不思議と落着き、眠り足らぬ身も、また生きる新らしい力がわき出づることを感得してきたのである。

さらに学業を受くるに一を聞いて万を悟り、憶持して忘れることなく日に日に成長、叔父観覺は自身の法器に非らずと、又童子の願うての希望にて一日も早く都へ上り学ばせたいとの思いを、姉の秦氏に同じ相談をその後も度重ねられた。

しかし母にすれば、先に良人を突然の悲劇で亡くし、今また一子を勉学のためとはいえ、遠く都へ上らせること、その胸のうちはいかばかりであろう。浄目を卜して父時國の墓前に上洛報告、一同は尽きぬ涙をたむけた。

「かたみとはかなきおやのとどめてし、この別れさへまたいかにせん」

母秦氏は涙ながらに童子の黒髪をうるおし、これが今生の永遠の別れになろうとは……。尽きぬ別れを口々に

して……。八百五十年前のことながら、子を見送る親の心は昔も今も同じ思いであったであらう。

勢至丸十五歳にて故郷を出でて、道中つつがなく入洛、やがて登山して持法房源光の門に入り、聡明利根にしてまことにただ人に非らずといわれた。

源光上人自から短才を避けて功德院の皇円に送り、台教高覧してその深義を究め、ついで叡空上人を師匠と仰ぎ一切経を遍覧して唐の善導大師の『観経疏』によって阿弥陀如来ご本願の深意を悟り、立ちどころ念仏往生を宗とし、上は天子より下万民に至るまで奇異の思いをなし、生身の仏と尊敬され、全て等しく救われる道を開顯された偉大な仏教改革者法然上人。

釈尊が御降誕後七日にしてご生母摩耶夫人がこの世を去られたことは、釈尊一生涯を通じて片時も忘れられない慕情の念が求道心に、法然上人もまた幼き時に突如の悲劇によって父君を亡くし、母君との別離のやるせない寄るべのない思いが、南無阿弥陀仏の法門を開いて世の人々貴賤貧富を問わず、生きる喜びを与え、また救われる仏教を広められたのである。

勢至丸さまを想う

勢至丸とその母

一筆とりむかひ参らせ候。御坊はるかに見奉らず、あけくれ御ゆかしこそ思ひ参らせ候。われわれ今日明日を^{あす}ごしがたきやうにこそ候へ。ただとにかくあさましき身にて候。ちと御下候^{おくだり}て御覧じ候へかしと思ひ参らせ候。さも候はずば、やすくしやうじ（生死）をはなるべきやうをこまごましろし給へ。そ

れをりんじう（臨終）の善知識、上人とたのみ候べし。申たき事あめ山にて候へども、筆をとめ参らせ候。

このお手紙は、法然上人の母親がたったひとりの頼み

大橋俊雄
おおはし しゅん ゆう

（横浜市西林寺住職）



とした、わが子勢至丸に書きあたえられたものと伝えられていた消息のなかの一通です。ここで母親は「そなたには、もう何年となく会っておりませんが、ご元氣のことと思います。いつかお会いして、お話を聞きたいと思っておりました。私たちは今日明日をも知ることのない、はかない身なのです。できることならば、少しのあいだでも結構です。帰国してもらえませんか。それができれば、わかりやすく生死をはなれ、往生できる道を、くわしく教えてください。それを臨終のとき、往生の縁となる良い友にしたいと思っています。申し述べたいことは雨山のようにたくさんあります。どうぞ浄土往生の道をお教え願いたい」と言っています。

聞くとところによると、わが子勢至丸は女人往生の道を発見したという。私にも往生できる道を教えてほしいという、願いをこめて出された消息とうけとめることができます。



勢至丸は長承二（一二三三）年美作国久米南条稲岡莊で

生まれましたが、九歳のとき押領使をつとめていた父漆間時国は、預所源内武者定明の夜襲をうけ世を去ってしまったのです。命終にのぞんで、時国は勢至丸を枕頭に呼びよせ「武家の習いによって遺恨をいだき仇討ちをすれば、必ずまた先方から斬りこんでくるでしょう。それに對しました此方がということになると、いつになっても争いはたえません。私の死を最後に無念であろうが、仇討ちをやめてほしい。そして平和な日がおくれるよう、そなたは私の菩提をとむらってほしい」と、毅然たる態度で遺言し、息たえたということです。

「父の遺言忘れがたく」と後年述懐していますように、父の遺したこのことは、いつも頭の片隅にこびりついていて、離れたことがなかったのです。この遺言を絶対の唯一の教えと信じて、菩提寺観覚のもとに弟子入りして、僧となる決意をしたのです。院主の観覚は母秦氏の弟にあたっていたということですから、叔父のもとで出家したことになります。

だが勢至丸の頭脳はすぐれていました。凡人ではない。このまま辺鄙な山里で朽ちさせるにはあまりにも惜しい。良い師匠につけて知識を身につけさせたい。こう

して観覧は母を説得して、かつて自分が学んだ比叡山に登らせることにしたのです。

向学心にもえている勢至丸にとっても、観覧のこうした好意に異存がありません。かえってそれは望むところでもあったのです。

ところが母にしてみますと、勢至丸はたった一人の子供です。その子を見送り登山させなければならぬのです。菩提寺ならば稲岡の館から北東に四十キロ、母子が会おうと思えば会うこともできますが、比叡山は女人禁制の山、比叡山には女性は登ることが許されていません。登ったら最後、二度と会えないかも知れないのです。登山について躊躇するのも当然です。

そのとき勢至丸は、「母のいますとき、朝夕母に仕え孝養をつまなければならぬことは、十分承知しています。しかし、私はもっと勉強をし、すべての人の救われる道を見出したいのです。しばしの別れをいとい、あのとき学んでおけばよかったという悔をのこさないためにも、ぜひ比叡山に登りたいのです」と語り、母を納得させたのでした。許しをあたえはしたものの、後髪をひかれるような思いであったと思います。

母は別れにのぞんで、涙をながし、

かたみとてはかなき親のとどめてし

この別れさえまたいかにせん

の歌を詠み、はなむけにしたということです。



古代仏教では「女人は障り重く、罪深い」が故に、一度身を男に変えなければ仏になることはできないと説いています。救われたいと願う女性には、男性以上に信心と修行を要求しました。それでも女性そのものの身で仏になることはできないのです。こんなことがあってよいものであるうか。ここに古代仏教の一つの限界があったのです。勢至丸の母でも例外ではありません。母は女性であったばかりに、穢れない生活をおくったとしても、浄土に生れることはできないのです。

この世で母の願いをふりきり登山した不孝は、僧となっても母ひとり救うことができなかったら、二重の罪をお

かすことになります。この世ではもちろんのこと、あの世でもともに浄土に生れ、母にまみえることはできないのです。女性でも武士でも、すべての人の往生できる道はないものかと、三十年にわたる求道ぐどうの末、女性でも往生できることを強調したのは、母への思慕が原因をなしていたとみてよいでしょう。



勢至丸が比叡山に登り、法然源空と名のり、念仏をとなえただけで、誰ひとり漏れることなく極楽浄土に生れることができるという専修念仏せんしゅねんぶつの教えを発見したのは、承安五（一二七五）年のことでした。その後専修念仏をすすめたことを理由に、承元元（一二〇七）年配流はいりゅうの身となり、一時都を離れたこともありましたが、多くは都のうちですごしています。

法然上人は、美作国で母に別れてからのち、会ったことがあるのだろうか。このお手紙はいつ書かれたものかはつきりしていません。しかし「御下候おくだうりて御覧じ候へかし」といっているところからしますと、すでに比叡山か

ら下りて東山にいたころではないでしょうか。十二年間山を下ってはならないという定めを守り修行していた籠山かごやま中であれば、たとえ会いたくても下りて来てほしいということはないでしょう。下山すれば自由の身、帰国できなこともあるまい、一度ぜひ帰って来てください、母にしてみれば会って健康を確かめたい、今の状態では入浴できそうもない、ただただ子供の帰りを待ちあぐんでいる、といった切ない願いがこめられているような気がします。

だが上人には帰る意志はありませんでした。母の手紙に接し返書をしたため、その中に「世も仮りの世、身も仮りの身、少しのあひだに無益の事を思ひ、罪を作り、輪廻りんね妄執もうしやくの糸いぶの世に、二たび帰り給ふまじく候」、どうせいつかは死んでしまふ身、私としては一日として無為にすごしているわけにはいかない。念仏往生の道をひとりでも多くの人に知らせなければならぬのだ。帰国している間などないと言いきっています。

法然上人といえますと、温厚なものの静かな人といった感じが、のこされている木像や肖像画などからうかがうことができますが、反面自己にきびしい態度をとってい

たのです。それは母に対してでもいえます。人の情から言いますと、母はせめてこの世にいるあいだ、一目でもよい、会いたいと思っっているのです。夫とたのむ人も、上人の九歳のとき世を去っています。一人っ子の法然上人は今都にいます。一族の誰かが母の面倒をみていたでしょうけれども、寂しい日をすごしていたに違いありません。

一目会ってやればよいのにと思いますが、上人はその願いを聞かないどころか、母の願いとはうらはらに、二度と帰ることはしないと、言いきっています。教えを弘めるのが、自分にあたえられた使命である。母の愛情によつて、それをさまたげることはできないと言うのです。これが宗教者法然のとつた態度だったのです。個のために生きるか、全のために生きるか、法然上人は後者の道をえらんだのでした。

岡山の誕生寺にある位牌には、母は久安三（一一四七）年十一月十二日三十七歳で没したと記しています。これによれば勢至丸は母秦氏の二十三歳のときの子、比叡山で修行中亡くなったことになるのですが。

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『全 訳 法然上人 勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人 選 択 集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師 観経四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師 六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人讃仰会

特

別

寄

稿

回心ということ



わた なべ と すい
渡辺 杜水

(西山浄土宗深草派
大本山円福寺法主)

本誌六月号、「念仏ひじり三国志」(寺

内大吉)に、浄土宗が宗歌としている「月か
げ」の歌に関して、その考証は明確ではない
が、作家の推理によって、これは法然上人の
「第三の回心」を暗示するものだ、と書いてい
る。宗派学徒ではかくも大胆な断定は許され
ないが創作家の説として大いに注目すべきも

のと思われる。

由來、法然上人の回心に就てはいろいろと
取り沙汰されてきた結果、最近になって四十
三歳説が定着し、立教開宗の年とされてい
る。しかし、それは一応の協定みたいなもの
で、学説としては多分に論議の余地を残して
いる。

従来の学者の説だけを、一応羅列するならば、

一、三十三歳説、永満(万)元年(一一六五)、私集百因縁集

二、四十二歳説、拾遺古徳伝、元亨釈書、一一七四年

三、四十三歳説、(定説)

四、五十四歳説、大原談義、文治二年(一一八六、文治五年説もあり)

五、五十八歳説、これは下山以後、東大寺三經講説以前という説であつて多くの学者が支持考証している有力な学説。

六、六十三歳より七十二歳の間という説

七、六十六歳以後という説、選釈集成りし建久九年(一一九八)

八、七十四歳説、愚管抄、建永元年(一二〇六)

この年、二月十四日、院宣によりて法本房行空、安楽房遵西が召し捕えられ、翌年、

二月十八日、念仏停止、法然上人四国流罪。しかし、この年の十二月八日、勅免の宣旨あり。

以上が法然上人の回心と考えられる年頃であり、しかもそれは、随所にあつたと思われる。これを要約すれば、回心というものは点ではなく、線であり、その一線上に点々と起伏するもの、ということが考えられるのではないか。

なお寺内大吉氏の三国志によれば、第一の回心は四十三歳の通説、第二は選釈集成る建久九年の説、そして第三の回心として建永二年(一二〇七)の冬、七十五歳、小松谷の麁堂に坐して病老体が見たところの月かけ(撰取不捨)の風光、そして流罪を恩寵と肯定して遠く四国の辺地まで敢然として出かけた、それは資料としての考証裏付けはないが、法然上人の心中に新たな決意、宗教上の回心がなくては成し得ない行動である、と断定してい

る。恐らくこの推理は妥当なものと思われる。しかし「冬」という言葉から言えば、それは七十四歳（建永元年）の冬でなくてはならない。前記、愚管抄の説と一致するものであると思う。いづれにしても、この時の法然上人の心中には悲壮なものがあり、第三の回心とも言うべき一転機があったと見ていいであろう。念仏の興行、教化に一死を賭けての挑戦とも見るべき行蹟がうかがわれる。新しい見方として珍重すべき説である。

なお、回心とは已証であり、一般的には入信・帰依に通じ発心（発菩提心）にもあたるのではない。そして、それが安心決定の体験であり自己自身の内証である限り、第三者から兎角の論議のできないものである、したがっていろいろの推定はできる、ということから諸説紛々の学説が出て来たわけである。

回心とは年月、日時を一点に限定するのではなく、線として蛇行する。そして退不退もあり得るものだといえる。勿論これは一般

論から言うことである。

このたび京都総本山知恩院門主となられた藤井実応上人の近著「仏道を歩む」を読めば、その中の一節に「求道の縁、徳川家康の回心」と題し、師が増上寺前の住持、岡崎市大樹寺において家康が死生の巖頭に立ち、宗教的に目覚めた経緯を述べられている。即ち回心とは目覚めであり、確信である。その信は力である。

「たとひ死刑に行わるとも、このこと（念仏・説法）言わずばあるべからず」と流罪におもむかれたのは法然上人の強い信念であり、使命観の発露である、と書かれてある。それは寺内大吉氏の説を裏付けるような趣意であると思った。

仏道といい、そして回心といい、宗教的な実践を通してこそのものである。私もまた念仏の称名の行に、ただただひたすらにありたい。

浄土句集

一田牛畝選

は静かである。夏は熱く冬は寒い京であるが薫風の頃の京が一番よいのである。

福岡 権藤みきを

楠若葉雨傘して法主の計

東京 真野 竜
舞姫のポーズをとりし牡丹かな

評 山は高いらしい。そして朴も高々と花

が咲いている。空気が澄んでいる、こんなところに住んでいれば長寿ならん。

評 美しい舞姫のポーズがとられた。牡丹も豪華で舞姫の衣裳もまた豪華無ぞかしでろう。

東京 細田 初枝

若緑竜馬の像は海に向く

東京 真野よし子

銭湯は庶民の名残り菖蒲暮く

評 若緑とは松の新芽を言う。竜馬は勤王であるから、開け行く日本のために、海

を眺めつつ開港日本を願った意味の銅像で、海に向いているのかも知れん。

三重 森 静枝
病むという人案ぜられ寒に入る

評 病人には寒いことが一番禁物である。

知人が病氣にかかった、いよいよ寒に入った、心配なことである。

評 どんな家にも自宅に湯があるから銭湯に行く人は少くなり、銭湯も姿を消して行く。がたまに残っているとこに菖蒲を葺いてあるなつかしいものである。

薫風や東山なる京の宿
福岡 行正 明弘

福岡 服部 光代
大島も伊豆も彼方に霞みけり

群馬 島津 か寿
山坊の犬気澄みをり朴の花

評 京で宿をとるならば東山がよいらしい。町の中は騒々しいが寺々を包む東山

福岡 江上 檀村
絶筆となりたる色紙春借しむ

東京 小笠原香祥
お手前の心静かに新茶の香

山口 三井 寛静
英美子忌の碑文の石の円やかに

山形 松田 允子
父眠る墓前に蝶のよくとまる

東京 猪瀬 幸子
若葉風駆けて来る児の髪をそく

山口 上野 明達
春の日や団参詣で善光寺

山形 松田 光誉
表の花にかかわりもなく蝶舞い来

福岡 荒牧 木魚
母の忌や母の好みし豆の飯

三重 山田 うた
風鐸のかすかにゆれて五月風

東京 田中 秀代
釣人の糸の光れる五月雨

大分 丹羽 難中
この寺に来て又蛇に出合うとは

福岡 高良 幸代
夕西麦刈り近き里輪かな

福岡 高良 慈風
豆飯を炊けば炊いたで婆同志

福岡 前田 秀峰
花の廟門葉率い大導師

福岡 荒牧 亀齡
石仏を背に佇つ妻の衣更

東京 吉田ゆきえ
信号の赤見えかくれ夏木立

福岡 行正一如子
七糸のお袈裟も軽く更衣

山梨 青山富貴江
五月晴皇后招き植樹祭

福岡 上滝津弥音
彼岸会や古里人と膝連ね

東京 満尾衣有子
蓮餅美しき師は京育ち

福岡 安藤平次郎
入学児踏切りは列正しおり

東京 新井 新生
更衣またも身軽となりにつけり

東京 末常てる子
擗越しにやさしく招く雪柳

一田 牛畝
法主葬みな墨染めの麻法衣

勢至丸ものがたり 第三回

宇宙船往来



わたしは 勢至丸（せいしまる）。
わたしは 父と母といっしょに 手をあわせていた。
いましも とおざかりゆく宇宙船。
それは わたしの友だち。

ぬの
布 村 哲 哉
むら てつ や

わたしが 宇宙船「なむ号」とともに この地球へき
てから 九年。
ここ美作国（みまさかのくに）での楽しい毎日をともに
してくれた友だちたち。
中国山脈の峰々の雪が消えて 春がおとずれると ま
ちかねたように わたしをさそって 馬の遺乗りにでか

ける父。わたしが 上手に馬をかけさせると 目をほそめて よろこんでくれた。

母は母で いつも わたしのことを気にかけてくれたから 家をでるときは かならず手をあわせて 見送ってくれる。

「どうぞ 勢至丸をおまもりください」と。

夏になれば 村の子どもたちといっしょに 池での水あそび。ふなや鯉とも仲よしだった。

色づいた山の木々のトンネルをくぐって 栗の実ひろい。＂こっちが大きい＂＂いや こっちの方が大きいよ＂＂といいながら、みんなで食べた秋の日。

雪の日には となり村の子どもたちとの雪合戦。

そんな毎日には あの世界での＂よかったね＂とよろこびあえる旅と同じであった。

ああ わたしは この地球への旅をしてよかった。やさしい父や母。そして わあわあとさわぐ おおぜいの友だち。びよんびよんとはねる たくさんの虫や さかな。ざわざわとおしゃべりをつづける 木の葉 川のながれ 風の音。いつも わたしのあとをついてくる小犬。

それは 宇宙船「父号」「母号」。「わあわあ号」、「びよんびよん号」、「さわさわ号」、「小犬号」、「鯉号」。みんな 友だちだった。

しかし――

それは ひどい日照りであった。

稲は どんどんと かれていく。

お寺やお宮での お祈りのききめもなかった。

畑の作物も とれない。

水あらそいが おこったのは その夏。

父 漆間時国（うるまのときくに）のところへ よその村の武士がやってきたのも そのときである。

その武士は 父にむかっていう。

「あなたは いつも 生きものみんな ほとけさまの子だといっておられるとのこと。あなたの村の人でも わたしの村人も 同じほとけさまの子ならば おたがいに助けあうのが本当であらう。困っているわたしの村のため どうか水をわけてもらいたい」

部屋の中からきこえてくるのは 武士の大きな声だけである。

わたしには だまっただまの父の顔が ありありと見えるようであった。

もしここで 武士のたのみをきき入れてやったら いったいどうなるのだろう。

それでなくても 少いいのちの水である。

だいいち お百姓たちが だまってはいまい。

「漆間さまは われわれを殺すつもりか。村の者が死んでもいいというのか」

そういつて わたしの家へおしかけてきて 火をつけるだろう。そして もしかしたら 殺されるかもしれない。

それがわかっていても 水をわけてやるべきなのか。よその村のために 自分の村の者が ぎせいになってもいいのだろうか。死ぬ人がでも。

それでも 父としては いつも言っている言葉の通りに 困っている人は助けてあげたかっただろう。自分一人が ぎせいになってすむことなら。

しかし こんどのばあいは それができない。おおぜ

いのいのちが かかっているのだ。

よその村人を助けるべきか、それとも 自分の村の人のいのちをまもるべきか。

武士を見送りながら じつと縁がわに立ちつくしている父の背中に その思いが にじみ出ていた。

その夜 よその村の者によって 漆間の池の水門はやぶられて、水は なくなった。

なかよしの鯉は かわきぎった泥の中で 口をあけ 丸い目が空を見ていた。

食べるものなくなった秋には 病氣の人や 年寄りが つぎつぎと死んだ。竹馬ごっこをしてあそんだわたしの友だちも。

わたしの まわりから いなくなる。

その友だちのさいごも かわいそうだった。

からだの弱っていた 友だちの父親は 食べものがなくて死んだ。

友だちはそれを 村の水門をやぶって 水をからにし

てしまった となり村のせいだと かんがえた。

「しかえしをしてやる、かたきをとってやる」といって
いた友だちは ある夜 となり村の武士の家へしのび
こむと火をつけた。

友だちは そのまま出てこなかった。

わたしは 父をせめた。

「父上は 日ごろ『われわれのいのちは ほとけさまか
らのおあずかりもの。たいせつにしよう』といっておら
れるではありませんか。それなのに どうして なんと
もしてあげないのですか。だから とうとう友だちは

――

だまっただまの父。

こみあげてくる わたしの涙の中にうかぶのは 宇宙
船「友だち号」。

出発のじゅんぴもおわったらしく 友だちが あいさ
つをしながらいう。

「地球では みじかい友だちだったけれど 仲よくあそ

べて よかったね。ありがとう。」

「なんにもしてあげられなくて 君は ぼくや父を う
らんでるんじゃないかい。」

わたしが あやまりながらいうと 友だちは かえっ
て なぐさめてくれるように

「それよりも これからは ぼくの宇宙船も思い出して
くれたまえ。『おーい』ってよんでくれれば すぐに
『こんにちは』って とんでくるよ。」

君には なかよしの宇宙船が たくさんあるんだか
ら。」

「ほんとうだね。いろいろな宇宙船と友だちになれたお
かげで みんなが来てくれて『がんばれよ、しっかり
ね』と はげましてくれるんだね。」

「そうなんだ。宇宙船は『あなたのところへは 行きま
せん』とも『お金をくれなくちゃ』とも『今 いそがし
いから』とも いわないよ。」

いつでも どこへでも だれのところへでも 来てく
れるんだ。

お日さまが照れば『かんかん号』の宇宙船が。

雨が降れば『さあざあ号』。

うれしければ『にこにこ号』が。

かなしければ『えんえん号』が きてくれる。」

そういう友だちに 手をふりながら わたしも あかるい声でいった。

「宇宙船の往来の旅が これからも楽しいことを祈る。さようなら 宇宙船『友だち号』」

こうして 友だちを送ってから まもなくのことである。父と 別れることになったのは。

父を殺したのが あのととき「水をわけてもらいたい」と たのみにきた武士であったのかどうかは わからない。

ただ 明石源内武者定明（あかしげんないむしゃだあきら）という武士だという。

いつもとかわらぬ 晩であった。

ぐっすりと 眠っていたわたしは 母にゆりおこされた。

戸がたおれて とおく近くにきこえる人々のさけび

刀のふれあう音 わめき声。

それらのひびきが ゆめの中のことのようにながれてふたたび まえとおなじ静けさ。

ゆめのなだろうか。

手をあわせて よこたわる父。

枕もとで 手を取りあっている母と わたし。

ロソクの火がまたたいて 母とわたしの影が ゆれる。父が 大きく息をしたのだ。

「みんな ほとけさまの子どもだ。たすけあわなければいけないかった。しかし わしは それをおこなうことができないで 多くのものを ぎせいにしてしまった。それでこのように……」

ほそく小さい声ではあったが そのなかには「これでほっとした」という父のおもいが こめられているようだった。

いちだんと 火が あかるくなった。

（つづく）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

インド文学の香り……『バーガヴァタ・プラーナ』抄訳（Ⅲ）



蛇王カーリヤ退治

小山 典 勇
こ や ま てん ゆう
やま てん ゆう

福德あるシュカは語る。

勇者クリシュナは、（カーリンディー川が）黒い蛇（カーリヤ）に汚されているのを見て、その清らかさを望み、かの蛇を追い払った。

王は質問した。

至福者はどのように、蛇を深く限らない水底に押し込んだのか。またその蛇は多くの劫の間、住所としてそこに住んでいたのか。話したまえ。至福者はあらゆるもの

に遍在し、自分の意のままにどこにでも住する。一体何人が、（至福者が身をあらわした）牧人としての気高い行為という甘露に喜び、満足しないであろうか。

福德あるシュカは語る。

カーリンディー川に蛇カーリヤの湖があった。毒の火によって、水は煮えたっていた。湖上を飛ぶ鳥も落ちた。しぶきと毒の水の波風に触れて、岸边では、動物も植物も死んだ。

激流・毒・勇敢さ、また彼によって汚された川を見ると、悪人を征服する化身・クリシュナは、カダンバ樹に登り、きつくまわしをしめ、てっぺんをゆすって、毒の川にとびこんだ。

蛇の湖は、人間の首長の落下の衝撃によって振動し、蛇の毒を吐きだし、(毒は)周囲にとびちった。毒の赤茶色の恐ろしい波は、百ダヌスもとんだ。しかし無限の力をもつ彼にとって何であらう。

象のような足どりをして湖を歩き、長い腕のゆれによる水音を聞き、自分の住所が荒らされたのを見ると、蛇はがまんできず、ねりまわった。

美しい、若々しい、黒い、清らかな、微笑で美しい顔(胸に)シュリーヴァトサ、黄色い衣の、恐れ気もなく遊んでいる、蓮のような足(を有する者)に、かみつぎ、怒って、関節をとぐろでまいた。

蛇のとぐろにまかれて、未だかつて見たこともないしぐさを見せる彼を見て、親友・牧人たちは動揺した。クリシュナに、自己・友・財・妻・希望をゆだねている彼等は、苦・憂・恐れに心を乱されて卒倒した。

牛・牡牛・子牛も鳴き、大変心配した。クリシュナに

視線を置いて、恐れあまり、泣いているように、立っていた。

さて、牧草地には接近する恐怖をもの語る、恐ろしい三種の前兆が、地上に、天に、そして彼等自身の間に発生した。

それらを見て、ナンダを始めとする牧人は、恐れおののき、クリシュナが、(兄)ラーマとは別に、牛を散歩させに外出していることを知る。

これらの凶兆によって、危険が近づいたと考えた。またそれを知らない人でも、彼を生命とし、心とする人は、苦・悲・恐れにさいなまれた。

子供から老人・妻まで家畜で生計する人々は落胆し、クリシュナの様子を見ようと出かけた。

このような元気のない人々を見て、マドゥの子孫・弟の力を知るラーマは、ちょっと笑ったが、何も言わなかった。

人々は愛するクリシュナを探しつつ、至福者の印のある足跡が示された道をたどって、ヤムナー川の岸边に達した。

そこここに、蓮・麦・ひづめ・稲づま・旗を備えた、種族の長の足跡を、牛や他の足跡の間に、見わけつつ急いで行った。

湖の中で、蛇のとぐろにまかれて、身動き出来ないクリシュナを、遠くはなれて湖の岸辺で見て、また思慮を失っている牧人、あたりで鳴いている家畜を見て、心を乱され、驚いた。

牧女たちは、至福者クリシュナに心を集中して、友情あるほほえみ・まなざし・言葉を思い出した。最愛の彼が蛇にかみつかれているので、激しい苦しみにおそわれ、愛人の奪われた三界はむなししいものと思った。

彼女たちは子供のあとを追って行くクリシュナの母を氣の毒に思い、同じようにおのいて、涙をどっと流した。めいめいが牧草地での楽しい話を話しながら、まるで死人のような顔で、クリシュナの顔に視線を投げかけていた。

クリシュナを生命とするナンダ等が、湖に入って行くこととするのを見ると、クリシュナの力の程を知るラーマは彼等をおしとどめた。

こうして（クリシュナは）自分の牧草地の人々が他によりどころがないのを見、自分を原因として女・子供も大変苦しんでいるのを知って、人間の道に従い、一瞬息をひそめ、蛇の束縛から立ちあがった。

立ちあがる身体によって、自分のとぐろをゆすられた蛇は、（彼を）投げだし、傘状の頭をもちあげ、怒って、シューシュー音をたて、身を起こした。鼻先に毒・フライパンのような、みすえた眼・たいまつのような口で、クリシュナを見つ。

クリシュナは、まるでガルダ鳥が蛇をもてあそぶように、とびはねた。蛇たるや、二またにわかれた舌で口の両端をなめつつ、大きく開いた毒の火のような眼をし、好機をうかがいつつ、動きまわった。

その動きで力の衰えた（蛇の）高い肩を折り曲げ、広い頭上の宝石に触れて、まっかな蓮のような足、一切の技芸の師、クリシュナは踊ろうとした。

踊ろうとするクリシュナを見るや、ガンダルヴァ・シッダ・スラ・チャールアナなど天界の女たちは、喜び、突然、小鼓・大鼓や他の楽器をかなで、歌いたたえ、花

や供物をもって近づいた。

実に百もの頭をもつとしても、どの一つも決して（降参した）頭を下げようとしないで立ちあがるその頭を、悪者に対する刑杖を持つクリシュナは、足の蹴りによって、踏みつけた。蛇は甚しく血を口・鼻から吐き出し、動きまわって、活力を失い、消沈した。

しかし怒りによって鼻息もあらく、眼から毒を吐き、頭をもちあげた。しかしその頭の上で（クリシュナは）踊り、足で蹴り、押えつけた。こうして彼は、最高神のように、花で供養された。

王よノクリシュナの野生的な舞によって、傘のような頭をつぶされ、口から血を吐き出し、身体を傷つけられ蛇は、動くもの、静止したものの師、最高神ナーラーヤナを心に念じ、助けを助めた。

一方、胎内に世界を有するクリシュナの、あまりの重さに倒れ、足の蹴りで傘のような頭を破壊された蛇を見ると、その妻たちは心を乱し、衣・飾り・髪結びも整わないまま、クリシュナに近づいた。

きもをつぶした妻たちは、身体を地上に平伏して、彼に敬礼し、子供をはじめ、手のひらを中空にして合掌し、邪悪な夫の解放を望み、保護を与える者（クリシュナ）に保護を求めた。

蛇の妻たちは願う。

過失を犯した者に刑杖はふさわしい。実にあなたの化身は悪人の破滅のためであるから。敵をも息子をも平等に視るあなたは、結果を考えて、刑杖を与えるべし。

あなたの恩恵が私たちにあるように。邪悪な者に対するあなたの刑杖は、実に過失を減するものであるから。たとえ怒りがあるとしても、あなたの恩恵が認められるように。なぜなら彼の身体的状態が蛇ということなのですから。

昔、自我を捨てて、他人を尊重した夫に、激しい苦行が必要であらうか。あるいは一切生類をあわれむ彼に、道徳が。一切の生命であるあなたは、なぜ満足しないのか。

夫について何物の威神力があったのか、私たちには知りえない。あなたの足の塵に触れる資格についても。それを願って浮気な財の女神シュリーは、欲望を捨て、長

時の間、誓いも堅固に苦行を行じた。

その足の塵に達した人々は、天界の頂きを望まず、一切の地上のもの、王権、地界の支配、ヨーガの成就、解脱をも望まない。

ところでこれなる蛇王は、無知の生れ、怒りのままなる者であっても、他のことでは達しえないものに達した。それを望みつつ、輪廻の輪をめくりつつ、身体を有するもの（靈魂）には、眼前に大いなる享樂がある。

主によって見守られるべき汝の家来によってなされた過失は、一度はがまんされるべきである。あなたが何であるかを知らない、愚者を許したまえ。

至福者よ！恵みたまえ。蛇は生命を失おうとしている。悲しんでいる私たち女に対して、生命を与えよ！あなたの家来である私たちに指示したまえ。あなたの命令によって私たちは実行すべきである。心のそこから実行する者は、一切の恐れから解放される。

福德あるシユカは語り続ける。

このように至福者は、蛇の妻たちに称賛され、足の打

撃によって意識を失い、頭をつぶされたものときはないした。

再び感官、生気を得た蛇カーリヤは、かろうじて息をしつつ、元氣なく、静かに合掌し、クリシユナに言った。

カーリヤは言う。

我々は生まれつき邪惡である。怒りは無知によって長くつづく。世間のものにとって本性は捨てがたい。惡を所有するから。

創造者よ！あなたによって、三徳性の果である全世界が創造された。様々の性質・勇氣・能力・源・種・意図姿が。

この世で我々蛇は、本性として怒りを有する。自ら迷わされている我々は、捨てがたい、あなたの幻力をどのようににして捨てようか。

あなたはここでは、第一原因・一切知者・世界の支配者である。好意か敵対か考え、それを我々に命令したまえ。

福德あるシユカは続ける。

このような言葉を聞くと、目的のために人間の姿をよそおう至福者は言った。蛇よ！お前はここに止まるべきでない。自分の親類・子・妻に富むお前は、ためらうことなく海へ行け。この川は牛・人間によって享受されるべきである。

人々はお前に対する私の命令を覚えていようであらう。そして朝夕の薄明時に、これを歌い、お前たちの（種族の）恐れをはなれるであらう。

私が遊んだこの川で水浴して、神々などを水をもって供養する。断食をし、私を思念し、尊敬する。そうすれば人はあらゆる罪をはなれるであらう。

さてお前は、この湖を捨て、ラマナカ島に移住すべし。スバルナ鳥は、その恐れから、私の足跡の印されたお前を食べないであらう。

福德あるシユカは更に続ける。

このように、驚異の行爲を行うクリシユナに言われて、蛇は喜び、彼を尊敬した。蛇の妻たちも恭しく。

神々しい衣・花飾・寶石・最もすぐれた装飾品・香・軟膏・大きな青蓮華の花飾によって。

世界の守護者を供養し、ガルダ鳥を旗印とする彼を満足させて、そして許された者は喜び、右めぐりをしてあいさつして。

妻・友・息子と共に彼は、海中の島ラマナカへ行つた。その時からヤムナー川は毒のないものとなったばかりか甘露の流れかと思うものになった。遊戯で人間の姿をする至福者クリシユナの恩恵によって。

△第十卷十六章▽

【解説】

インドの大衆にとって今日もなお人気のあるクリシユナ伝説の中でも、幻想的な場面である蛇退治のストーリーである。

蛇が、特に毒蛇が毒蛇として生きるならば、周囲のものにその毒によって害を与えることになる。しかしそれが毒蛇の本性である。この害を与えることが本性であるものの生き方が、このストーリーのテーマでもある。

それでは我々人間の本性は一体何であらうか。お盆の一時、人の人たる由縁を考える時であらう。



念佛ひじり三国志

(九)

法然とゆづる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

聖覚法印は、年齢は若いが父澄憲ゆずりの弁舌で仏法を説き、禁裡の公卿たちから多大の支持を受けていた。俗な言い方をすれば、当時の花洛で「売れっ子」の僧だった。

当然、聖覚はこの上流社会の機微にも通じていた。

「ああ、あの方ですか」

と卿三位兼子の名前を聞いて、口もとを複雑にゆがめた。後鳥羽院政における影の権力者――

油断のならない相手ですぞ、と言いたげである。

「権力の独占には盲目となる人とわしは見た」

明遍は甥の眼をうかがいながら、作戦の一端を小出しにしてみたくなった。

「如何にも」

「利には利を以って説くことじやろう」

「利と申しても財貨には意外と恬淡たるところがある」

「その利ではない。権勢の座における利じや」

「なるほど」

「卿三位が目下最も気になるものは何か」

「おのれの権勢の邪魔になるものという意味ですか」

「それは、院の寵愛を一身に受けている女人ではなからうか」

「……」

聖覚は黙して答えない。

「女人の敵は女人じゃ」

作戦を小出しにしながら、明遍は次第にそれが確信にふくれあがってくるのをおぼえた。

「誰かな、現在院の寵愛を一身に受けている女人とは？」
知っているくせに聖覚はとぼけているように思えてならない。

「わたしにもわからない。卿三位と話していれば明らかになろう」

洩らすのはそこまでだった。

いかに甥の聖覚とは言え、手の内のすべてをさらけ出してしまふのは得策ではなかった。聖覚も深追いはしない。

「これから、ゆかれるのか」

「うむ……仏法の大事だ。ゆかずばなるまい」

と言ってしまつて明遍は、ちょっと反省する。

沙弥法然の身を守ることが、仏法の大事と言えるだろ

うか。法然はそれほどの仏者なのだろうか。

未だそんな反省を胸で噛みながら安居院をあとにした。

明遍が卿三位兼子がいる岡崎の頼実邸へ到着するまでの間、いま一度親鸞たちの問題にふれておきたい。

あの建永の法難時、熊谷蓮生房は何をしていたのか。やがて彼は上品往生を大衆の面前でやってのけるわけだが、これも法然流罪という非法な裁きへの抗議だった、と筆者は受けとめている。

親鸞はどんな罪科で越後へ流されたのであろうか。いちおうの推理は立ててみたが、さらに突こんで論証しておく必要があるであろう。

「歎異抄」は親鸞の代表的な所懐として後世の評価も高い。

所懐としたのはこれが親鸞自身の述作ではなく、その門弟唯円による聞き書きの編述だからである。

当時、親鸞には唯円という同名の門弟が二人いた。鳥喰（とりばみ）の唯円、河和田（かわだ）の唯円である。

どちらも東国の地名だった。「歎異抄」の編述者は河和田の唯円と言われる。

親鸞が亡くなったあと、とりわけ関東方面で親鸞の教えを曲げて布教する門弟が多かった。唯円はこの風潮を嘆き、師の正しい教えを伝承するために、生前の聞き書きなどをまとめあげたのが「歎異抄」だった。

「異」を「歎く」から「歎異抄」なのである。

後世において「歎異抄」の評価はすこぶる高い。宗教論叢としてばかりでなく、その文章力が近代人の鑑賞に耐え得るのである。

近代人にアピールする要因として、その論理がつねに逆説志向で新鮮であることが指摘できる。よりなまなましい迫真力がみなぎっているのである。

悪人正機の論理である。

——マタアルトキ唯円房ハ我ガ言フコトヲバ信ズルカ、ト仰セノ候ヒシ間、サン候ト申シ候ヒシカバ、サラバ言ハンコト違フマジキカト重サネテ仰セ候ヒシ間、謹シテ領状申シテ候シカバ、例ヘバヒト千人殺シテンヤ、然ラバ往生ハ一定スベシト仰セヒシトキ、仰セニテハ候ヘドモ、一人モコノ身ノ器量ニテハ殺シツベシトモオボヘ

ズ候シカバ、サテハ如何ニ親鸞ガ言フコトヲ違フマジキトハ言フゾト。コレニテ知ルベシ。何事モ心ニ任セタルコトナラバ、往生ノタメニ千人殺セト言ハンニ、即チ殺スベシ。然レドモ一人ニテモ叶ヒヌベキ、業縁ナキニヨリテ害セザルナリ。我ガ心ノ良クテ殺サヌニハアラズ。マタ害セジト思フトモ百人・千人ヲ殺スコトモアルベシト仰セノ候ヒシカバ、我ラガ心ノ良キヲ不良シト思ヒ、悪シキコトヲバ悪シキト思ヒテ、願ノ不思議ニテ助け給フト言フコトヲ知ラザルコトヲ仰セノ候ヒシナリ

引用が長くなった。大半が仮名文だが適宜に漢字を補足して読み易くした。

心から往生を願うのであれば、今から人間千人を殺して来い、と親鸞は唯円に命令する。唯円は「私ごとき器量では一人だって殺せません」とたじたととなる。

親鸞はそんなまぬるい信心の態度で、真の救いを希求できるか、とたしなめる。それこそ「本願誇り」とまやかしたとも言ふ。

＜壺とかわらけなど＞



恐ろしい文章である。制法も、倫理も、いわゆる社会良識を無視しきって信心の純度を透析しようとする。

親鸞はこの文章のすぐあとで、典拠として聖覚法印の「唯信抄」を引用する。

——弥陀仏イカバカリノ力マシマスト知りテカ罪業
ノミナレバ救ハレ難シト思フベキ

この強力な筆力は現代人をも圧倒する。高度な救済を望むなら、奈落の深淵を覗いて来い、と命ずる。

下司（げす）な言い方をすれば、こんな文章が書けるのはこれに近い実体験、修羅真剣をくぐり抜けてきた者だけであろう。

まさしく親鸞は、あの建永の法難時、惨酷な処刑を覚悟したにちがいない。屈辱の斬首を今日か明日かと予測しつつ全身全霊で阿弥陀仏の救済を信じたことである。

だからこそ「歎異抄」の次のような文章も湧きでてくる。

——タトヒ法然聖人ニスカサレマイラセテ、念仏シテ地獄ニオチタリトモ、サラニ後悔スベカラズ候。ソノユエハ自余ノ行モ励ミテ仏ニナルベカリケル身ガ、念仏申シテ地獄ニモオチテ候ハバコソ、スカサレ奉リテトイフ後悔モ候ハメ。イズレノ行モ及ビ難キ身ナレバ、トテモ地獄ハ一定住ミカゾカシ

たとえ法然上人に欺まされ、念仏して地獄へおちても全く後悔しない、と親鸞は言い切るのである。

これを安易に受け止めたら「何を大げさに」ということになるであろう。教義教説だけの問題だったら、地獄へおちようが正しい往生を遂げようが、さらさら証固は残らない。見届ける証人もいないわけである。

親鸞の妻惠信尼は、大正十年（一九二二）に発見された娘覚信尼への書状のなかで、こう書いている。

——上人（法然）ノワタラセ給ハン処ニハ、人ハ如何ニモ申セ、タトヒ惡道ニワタラセ給フベシト申ストモ……云々

豊かにひろげてくれる。

二一

「口伝鈔」は本願寺三世、覚如上人の撰述になる。

これは親鸞がその子如信（本願寺二世）に向って「おり
の御物語」した内容を、覚如が伝承してまとめたも
のである。

その冒頭で、

アル時、黒谷聖人（法然）浄土真宗御興行サカリ
ナリシ時、上一人（天皇）ヨリハジメテ偏執ノ輩
ヲ一天ニ満テリ。コレニヨリテ、カノ立宗ノ義
ヲ破セラレンガタメニ禁中ニテ七日ノ御逆修ヲ
ハジメ行ハルツイデニ、安居院ノ法印聖覚ヲ
唱導トシテ「聖道ノ諸宗ノホカニ別シテ浄土宗
アルベカラザル」ヨシコレヲ申シミダラルベキ
ヨシ勅定アリ

いつのころか不明だが、建永の法難直前としか考えら

机上にもたれたり、腕組みしたりの思索ではなかった
であろう。親鸞が直面した地獄とか悪道は、なまなまし
い現実であった。逮捕、拷問、処刑……藤原定家がその
日記の「明月記」で書く「近日、只一向専修ノ沙汰、搦
メ取ラレ、拷問サルト云々。筆端ノ及ブ所ニアラズ（建永
二年二月九日）」という酸鼻をきわめた地獄であった。
そして、師の法然もまた同じ奈落の底へ引きずりこま
れようとしている。

この法然に欺まされて同じ奈落の底へ引きずりこまれ
ても「サラニ後悔スベカラズ候」の親鸞であった。

こうした実体験を踏まえずに、どうして「歎異抄」の
あの激越な文章が湧き得たであろうか。悪人正機の確信
を、弟子どもへ唱導しきれたであろうか。

親鸞がああ法難事に、なんらかの暴発、狂燥行為があ
ったにちがいない。だからこそ逮捕、越後の流罪なの
であろう、とはすでに推測した。

推測だけで確たる資料はない。

確たるものではないが、それを暗示する記述が絶無で
もない。後世の取りつくりでかなり体裁はととのえら
れているものの、「口伝鈔」の書き出しは推測の領域を

れない。天皇以下、専修念仏を嫌う徒輩が天下に充滿していて、これを「申シミダラルベキ」——誹謗すること——を目的として宮中で「法論」が開かれた。聖道門の諸宗のほかに浄土宗を新たに立宗させることは是非か。それが法論のテーマとなった。審判官には聖覚法印がえらばれたのであった。

「口伝鈔」の記述を、このあと物語風に追うと、こんな筋道になる。

法然は、この法論へ専修念仏教団から誰か代表を送りこまねばならなかった。

「もしこの時申し破られなば浄土の宗義、何ぞ立せんや」

教団の存立自体が危うくなるとして、その人選に悩む。

やがて決断を下し、

「善信房その仁たるべき」

と親鸞を指名するのである。

門弟たちも

「もっとも然るべき」

と全員が一致して同意する。

だが親鸞は辞退する。未だ年若く（流罪の建永二年時ですら三十五歳であった）法然門へはいつて日も浅かった。重大な使命もだがたく、結局親鸞は出かけることになる。介添人として問題のひじり善禪房西意が同行する。

まず安居院に聖覚法印を訪ねると、折から風呂（温室、うんしつと読む）へはいつていたが、すぐに出てきて親鸞を優さしく迎える。

「たとひ勅定なりといえども師範の命をやぶるべからず」

と言って聖覚は法然の弟子たる立場を明確にする。

「聖道、浄土の二門を混乱せず、あまつさえ浄土の宗義を申し立てはんべりき。これ然しながら王命よりも師孝を重くする故なり、御心安かるべき由、申さしめ給ふべし」

かくて親鸞は宮中へ出かけ、堂々と浄土門の教相判釈を述べ、新しく宗派が樹立されるべき必然性を主張したのである。聖覚もまたこれを強く支持して、誹謗しように手ぐすねをひいていた聖道僧たちの口を封じた。

上乘の成果をあげて、東山吉水の禪室へ戻ってくる。

法然に報告する。同行した善緯房西意もそれを裏付けて、

「西意、二座の説法、聴聞仕まう終りぬ。言語の及ぶところにあらず」

と親鸞の発言の正確さ、態度の清々しさを賞め讃える。

——三百八十余人ノ御門侶ノ中ニ、ソノ上足ト言イ、ソノ器用ト言イ、スデニ清撰ニアタリテ使節ヲ勤メマシマス所ニ、西意マタ証明ノ発言ニ及ブ。

恐ラクハ多宝証明ノ往事に相同ジキモノオヤ。

コノコト大師聖人ノオン時随分ノ面目ナリキ

「口伝鈔」はこう結んでいる。多宝証明とは法華經の宝塔品の説で、法華の説法がおこなわれたとき多宝如来が宝塔を湧き出させて、釈尊の説法を証明して見せたことをいう。

ところで親鸞が法然門へ入ったのは建仁元年（一二〇一）の三月ごろと思われる。彼二十九歳の春だ。それから越後流刑までの六年間に宮中でそんな「法論」が実施

されたのだろうか。

聖覚法印がからんだとすれば、元久元年（一二〇四）に比叡山へ送ったいわゆる「登山状」が考えられてくる。ただしこれは「法論」ではなく、山門の弾圧に対して法然が聖覚に書かせた文書である。

聖覚の立場は法然の門弟として「王命ヨリ師孝ヲ重クスル」などという強い姿勢ではない。念仏門への良き理解者として比叡山との融和をはかろうとする意図が歴然だ。

例えば、

「念仏を修せん者は余行をそしるべからず。そしらば即ち弥陀の悲願に叛くべき故なり。余行を修せん者も念仏をそしるべからず。また諸仏の本誓にたがふが故なり。しかるをいま、真言止観の窓の前には念仏の行をそしる。一向専念の床の上には諸余の行をそしる。ともに我々偏執の心をもて義理をたて、互いにおのおの是非の思いに任して会釈をなす。あに正義にかなはんや。みなともに仏意にそむけり」とある。

同じ聖覚法印が書いたと言われる「唯信抄」では、他

力念仏の絶対性を強調している。

これは矛盾ではなく、「登山伏」を書いた時点との聖覚の立場の相異であろう。つまり未だ法然義に徹しているとは思われず、ただの理解者であったことを物語っている。

とすればこの建永の法難時に聖覚が宮中へ乗りこんで「王命ヨリ師孝ヲ重クスル」ことはあり得ないであろう。

現に藤原定家の「明月記」は、逮捕された念仏ひじりたちが苛酷な拷問を受けている二月九日からわずか十八日後の記述で「御説経ニ於テ聖覚僧都、釈迦四天画像ヲ供養。長房卿奉行……次デ七仏衆師結願。庭上ニ衆有リ。公卿東ノ対代ノ座ニ在リ、頭兼朝臣參ジテ幔ヲアゲ公卿ヲ召ス。内府以下着座。御加持オワンヌ」という仏事を司祭しているのである。

やはり「口伝鈔」における親鸞の武勇伝(？)は後世の粉飾であろう。真宗の開祖を法然門下中できわだせたい意図から発したと思われる。

ただこの物語で注目したいのは、かつ推測の領域をひろげる種子となりそうなのは、影のように登場してくる

善綽房西意である。あえて筆者も「問題のひじり」としておいた。

親鸞の介添人として禁裡へ出向き、法論を巨細にわたって検分してきたこの善綽房とはいったい何者であろうか。

三

嵯峨の二尊院に念仏ひじりたちの連署状が現存している。

これは元久元年(一二〇四)十一月七日、法然が門弟たちの聖道門への暴挙をいましめて、七箇条の制誡を定めてそれを守ることを誓わせた交名状だ。前に書いた聖覚法印の「登山状」と一連をなすものである。

法然自身の「沙門源空」に始まって、信空、感西、尊西、証空、源智らの内弟を先頭に百八十九名に及ぶ。その十七人目に西意の名がある。幸西、住蓮に続く。上足の門弟といえるであろう。

そればかりではない。建永の法難時にはまつ先に処刑されているのである。

ちなみに死罪を受けたのは安楽、住蓮と性願房、そしてこの西意の四人である。安楽、住蓮が女性風紀問題だったことは知られているが、西意や性願房の罪科は全く不明だ。

わずかに「摂津国ニ於テ誅ス。佐々木判官ノ沙汰カ」と西意には注があり、性願房は「一人口ヨリ白蓮華出生ス」と書かれ、安楽、住蓮ともども近江の馬渕で斬られたとなっている。

推測の領域をひろげると、法然への官憲の断圧がきびしくなり、死罪にもとエスカレートしてきたとき、禁中へデモをかけた頭目がこの善綽房西意ではなかったか、とも考えられる。

「口伝鈔」が書く禁裡での法論、じつはそのデモ行進ではなかったであろうか。西意を先頭に親鸞も追従して断圧の非を鳴らして押しかけた。

だが、たちまち捕らえられ、拷問を受けたあと、頭目の西意は死罪。親鸞は未だ小者だったがために死一等を免ぜられ、越後へ流されたという筋書だったのではなからうか。

本願寺の二世や三世が、まさか宗祖をデモ隊の一員と

は書けまい。ために禁裡での法論という紛飾がなされた、とは考えられないであろうか。

さらに親鸞のひじり名である綽空とか善信の連想からもこの善綽房西意が法然門中での直属の上足だったとも想像できる。西意が重要人物として登場してくるのは、親鸞サイドの資料にのみ限定されるからである。

宗教上の伝記類は、後世の末弟によって多くの紛飾、加筆がおこなわれるのは常道だ。額面どおりには受容できないにしても案外、かくしきれぬ事実がそこに敷設されているものである。

それはともかく建永の法難時、念仏ひじりたちが如何にわが身を捨て、処刑されることもいとわず、彼らの師法然の身を護り抜こうとしたか、見逃してはならない事実であろう。

明遍はすでに岡崎の頼実邸にいる。主人の大臣は院に参内しており、卿三位兼子と対座していた。

「このままでは騒ぎがひろがるとおっしゃるのですね」すべてを聞き終えた兼子は、しかし満面を匂やかな笑顔で飾っていた。

笑顔を保ぶような話題ではなかった。天下の一大事、

とまではいかないが、人間の生命がかかわっている。

それでも笑顔が結べるのは、兼子の個性というよりも環境であろう。

宮廷の大奥で政治の枢機にたずさわる女人に共通したポーズだった。どんな難問題、また苦境に追い詰められても笑顔を絶やさない習性が身に付いていた。

明遍は同時に二人の女人の顔を思いうかべている。

一人は義理の母、父信西入道の妻紀伊ノ二位だった。

いま一人は、後白河院の愛妾で明遍自身も情を交わしたことのある高階柴子であった。

どちらも同じような笑顔をこぼす女たちである。

「ここは遼原にひろがる火を、一戸を焼くだけに留めておくのが上策かと思えます」

明遍は兼子のやわらかい眼差しを避けるようにした。

「あの小鬼を、焼きますか」

「小鬼……」

「院にしてもそれほど御執着はないかと思えます。小鬼などと呼びはじめていますからね」

愛妾伊賀局を小鬼と呼んだのは後鳥羽院自身らしい。

事実、この院の気持は別の白拍子、後の伊賀局へ移って

いたのである。

「処置は一刻も早い方がよろしいでしょう」

「わかりました……それで、明遍さま」

あらためて兼子は名で呼びかけてきた。

「何ですか」

「そのようにしておさましたあとは、どうなるのですか。明遍さまが念仏者たちの頭目におなりなのですか」

「まさか……」

笑顔の底で、鋭く兼子の瞳が光っている。

「いいではありませぬか。おなり遊ばせ。専修念仏の頭目といえ、法然ご房でもおわかりのとおり、並ぶ者のない権力でございますよ。さよう、法然ご房は、それを権力として使おうとしなかった。いいえ、使うことの出来ない人なのでしょね。その点、明遍さまは違います。あなたには出来ます」

ねっとりとした女の体臭が肌へまつわりついてきた感じだ。

ハッとなって兼子の顔を凝視したが、笑んだ表情は変わらず、姿勢も坐る位置も不動だった。

身一つうごかさず、言葉と気配で相手を弄絡できる不

思議な才能というほかはない。

院の側近者たちが、かねがね洩らしていたものだ。

あの剛毅な後鳥羽院が、卿三位にかかる金縛りに遇ったように従順になってしまふという。乳呑み児のときから、乳人の兼子はそんな訓練で後鳥羽院を飼い馴らしてきたのかもしれない。

口が大きくて、金ツボマナゴで顔は狭く、美女どころか醜女に近いこの老女に、頼実がころりと参ってしまった秘密もそこにあるのだろう。

「吉水ノ僧正もねらいはそこにあるようです」

「吉水ノ僧正が？」

天台座主慈円である。専修念仏を一気に山門へ吸収してしまおうと意図すると言う。

「愚管抄」で慈円が法然や専修念仏の徒を悪しざまに罵りながら、法然の弟子証空と密着している事実は、そんな野望を裏付けるか。

「しかし吉水ノ僧正では誰も相手にしますまい。第一、鎌倉方が疑惑の眼で見ます」

「政路のことはともかく、専修の人たちは純粹に信心の一念に燃えています。純粹な信心を持っていない者は相

手にしません。わたしをもふくめて」

この座へきて明遍は初めて腹を割った発言をした思いだった。

「明遍さまも純粹な信心者ではなかったのですか」

卿三位兼子も初めて声を転らばせて笑った。

(くくく)

◎ハガキ印刷や案内状等、小物印刷にご利用下さい。
ご寺院関係の皆様は、とくにご紹介いたします。

◇ 阿島印刷有限公司 ◇

〒164 中野区弥生町五―八―一六
TEL (〇三) 三八二―一〇二三

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い申し上げます。昭和五十六年度より、年会費誌代を三〇〇〇円に値上げいたしました。お見限りになることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

舞見御中

東京都豊島区西巢鴨三二〇—一 〒170	大正大学 電話(〇三)九一八—七三一—代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六	佛教大学 電話(〇七五)四九一—二二四—代表	淑徳短期大学 学長 長谷川良昭	〒174 東京都板橋区前野町五—三—七	京都文教短期大学 学長大橋俊有	〒611 宇治市模島町八〇
埼玉工業大学	松川文豪	淑徳高等学校長	里見達人	〒174 東京都板橋区前野町五—一四—一 鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長	上田祐規	学校法人 芝学園 理事長 豊岡益人 学校長 徳久鐵郎	
東山学園長	石井俊恭	〒606 京都市左京区永観堂町五一 東海高等学校長	滝俊立 〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	光心寺住職 北山良祐	〒425 焼津市東小川一—六—一	祐天寺 巖谷勝雄	

舞見御中

鎌倉大仏殿 高德院 佐藤 密雄 〒248 鎌倉市長谷四―二―二八	愚鈍院住職 中村 真道 〒980 仙台市新寺三―二―一七	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤 順底 〒020 盛岡市南大通三―一―四九	金田 明進 〒302 取手市白山二―九―二八 弘経寺
〒113 東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部 仙順 電話(〇三)八一―一三三七	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口 善雄 〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺	西住院 戸川 靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤 弘道 〒328 栃木市万町二―一四 電話(〇二八)二二―〇八〇二	芳泉寺 なき 柳 楽 真純 じゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗教学局長 法然上人降誕慶讃事務局長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟 真寺 電話(〇五三三)五二―五五六六

舞見御中署

無量山 伝通院	九品寺住職 漆間 純成 〒530 大阪市北区同心一―四―八	回向院住職 本多 清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇	九品仏浄真寺 清水 順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 神奈川県仏教会副会長 柴田 敏夫	称名寺住職 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二二―一五七八	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区南青山二―二六―三八	教安寺住職 野呂 幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―二 電話(〇四四)二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸 寺 原口 徳正	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒025 花巻市双葉町六―四 仏教福祉センターよるひる銀行	〒030 青森市本町一―一―一二 正覚寺住職 楠美 知行	光運寺住職 飯田 信弘 〒510 四日市市中部三―一二

舞見御中

廣隆寺住職 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一丁目	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六一五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	浄土宗議會議員 龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二一五一
お骨仏の寺 一心寺 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五 電話(〇六)七七一一〇三七二(代)	知恩院布教師会九州支部長 聖徳寺住職 金子貫達 〒850 長崎市錢座町四一五九	浄土宗議會議員 光明寺住職 山口諦存 〒673 明石市鍛冶屋町五一二〇	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西二丁目
大本山光明寺執事長 西念寺住職 北邨謙順 南足柄市沼田三一五	北川一有 長寿院 〒144 東京都台東区鳥越二一三一八	徳興山建中寺 村上賢瑞 〒461 名古屋市中区筒井一七一五七	仏生山法然寺 細井俊明 細井照道

◎読者の皆様へお願い——

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただけてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一幕や所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十八巻 八月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年 七月二十五日 印刷
昭和五十七年 八月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一—十一—六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒(二三) 振替東京八一八二一八七番

舞見御中署

総本山 知恩院

門主 藤井実応

浄土宗宗務庁

浄土宗東京事務所

大本山

増上寺

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山

善導寺

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

鵜飼隆玄

稲田稔界